

IRICE PLAZA

第7号

TRICE PLAZA 第7号発刊によせて	高柳義也	4
TRICE PLAZA 第7号発刊によせて	島岡 丘	6
第1部 「RICE講演会		
脳波を用いた認知に関する実験言語学的研究	城生佑太郎	9

第2部 月例研究会発表論文

◆英文学		
(1)英詩のアイデンティティ	笠原順路	34
◆早期英語教育		
(2)Reading Instructional Models for Beginners: The Effects of Systematic Phonics and Whole Language	下 真	41
◆翻訳論		
(3)訳せないもの —Traduttore, traditore—	岩瀬孝雄	55
◆英語音声学		
(4)イギリス英語のイントネーションの形態—O'Connor and Arnold(1973)をデータとして—	湯澤伸夫	63
◆TOEIC関連		
(5)The Role of TOEIC in Learning English	Mark Melichar	72

- ◆ コミュニケーション関連
- (6) コミュニケーションと英文法 岡田伸夫 77
- (7) Communicative Language Teaching 木塚雅貴 85
- (8) An Approach to Teaching Intercultural Communication 村松美映子 95
- (9) 談話展開に関する一考察 渡邊真由美 102
- 社会言語学的観点からの日英比較—
- (10) コミュニケーション能力 —言語学から教育学へ— 今井幸弘 109

◆ 指導法関連

- (11) 内容理解のための音読指導 : A.L.Tとの見解の相違を越えて 卵城祐司 117
- (12) ヴィトゲンシャイン：言語と教育 —意味と出来事の記述純化— 久部和彦 126
- (13) 学習者の疑問から見出す英文法指導の原点 —実験的発見の視点から— 石崎貴士 135
- (14) Catherine Macklon on the Role of English Teachers in Japan 岩瀬孝雄 144
- IRICE 年間報告 148

(表紙イラスト／平田 照代)

英詩のアイデンティティ

笠原 順路

まず、今日のこの会で話しさをする機会をお与え下さいました島岡丘先生に厚く御礼申し上げます。さて、ここには、英語学や英語教育を専門にしてこられた方が大勢いらっしゃると伺っていますので、前半部では、そうした皆さんにも詩を好きになってもらえるよう、敢えてよく知られている作品（Keats と Gray）を選び、それらの冒頭の一節をもっぱら語学的側面から読もうと考えています。その際、いわゆる伝統的な英文科の英詩の講義で聞かれるような話しさは極力避けたつもりです。Keats の場合は prosody と意味のつながりを、Gray の場合は専ら語の意味と collocation のことを話し、そうした内容が散文ではなく、韻文でしか表現できないことを述べ、そこに英詩の identity があるのだ、と主張したいと考えております。作者の伝記や思想的背景などについては意図的に触れません。そして、語学的に詩を読むことだけで十分に楽しいのだというふうな人に分かっていただけたらと思っています。

話の後半は、私が現在取り組んでいる研究の最先端の事柄のなかから、語学的要素の強い点を取り出し、ある程度まとまりをつけてお話しします。扱う作品は、Shelley, "Ozymandias" と Wordsworth, "Michael" です。Shelley の場合は意味と文法構造のつながりのことから始め、それが、作品のテーマとどう関係するかを述べ、Wordsworth の話では、一つの単語の解釈を作品全体のテーマとの関わりで論ずる予定です。（本稿では、紙面の都合上 Shelley と Wordsworth の話しあは省略する。）

皆さんは、詩というと、とかく文学性というふうことを中心にお考えになる方が多いと思いますが、そもそも詩には、（言語藝術である以上、当然のこと

として) 語学的側面と思想的側面があります。言葉をかえて言えば、形式と内容ということです。注意したいのは、語学的形式が下位にあり、その上に思想的内容や文学性が乗っているのです。形式と内容は表裏一体の関係にあります。もし、皆さんのなかに、過去において、あまりに文学性を全面に押し出したような英詩の講義を受けたがために、英詩が嫌いになってしまった方がいたら、是非、今日の私の話をして頂きたいと思います。または、その反対に、英詩演習のような授業で、やたらに弱強5歩格を強くことを強要(?)されたために、英詩が嫌いになってしまった方がいらっしゃら、今日の私の話して、英詩を読む際の正しいOEDの引き方に触れてほしいと思います。

*

まずは、John Keats (1795-1821), "Ode on a Grecian Urn" の冒頭部を見てみましょう。詩人 (=語り手) がギリシアの古い瓶に呼びかけている部分です――

Thou still unravish'd bride of quietness,
Thou foster-child of silence and slow time,

この作品の韻律形式は弱強5歩格 (iambic pentametre) ですので、規則通りに読むと、

Thou still unravish'd bride of quietness,
 / ~ / ~ / ~ /

となり、行末の語は、第1音節quiと第3音節 ness に同等の強勢が置かれます。しかしこれではあまりに不自然です。そもそも、韻文の強音節とは、前後の弱音節との比較でそれより強い、ということです、必ずしもそこでの強音節と同等の強勢があるとは限りません。

(a) QUI-et-NESS (b) QUI-etNESS (c) QUI-et-NESS

では、どのように読むのでしょうか。そこで求められるのが、韻律形式を尊重しながら、且つ自然さを失わないように読むということです。
quietness という語は、通常、散文の場合なら、第1音節だけに強勢がきて (b) QUI-etNESS と読みますが、今の場合は、第1音節と第3音節と第3音節が強勢になりますので、第3音節 ness を、第2音節 et よりも強く、しかし第1音節 qui よりは弱く発音し、結果として、(c) QUI-et-NESS というような読み方になります。実際に発音なさうてみるとおわかり頂けると思いますが、この (c) QUI-et-NESS という読み方の方が通常の (b) QUI-etNESS という読み方より、この語のもつている「静寂」という意味が一層強調されるのです。quietness という単語が、この語の本來もつている意味通りに読まれるといふことに、詩の音声に敏感な人は快感を覚えるのです。

次に第2行目を見てみましょう。第1行目と同様、iambic pentametre 強弱5歩格の韻律形式にしたがって、機械的に scan すれば、

~ / ~ / ~ / ~ / ~ /

Thou foster-child of silence and slow time,

となります。しかし、これではこの行の持つている意味が損なわれてしまします。とりわけ、and に強勢が置かれているのが不自然です。そこで、この行の持つている意味を考えて自然に読むと、

~ / ~ / ~ / ~ / ~ /

Thou foster-child of silence and slow time,

となります。さて、これを韻文的に読むはどうなるでしょうか。韻文的に読むということは、音楽的に読むということです。この行を、散文の場合と比べて、より音楽的に、つまり、各強音節間の時間的間隔ができるだけ等間隔にして読んでみましょう。

~ / ~ / ~ / ~ / ~ /

Thou foster-child of silence and slow time,

このように読むと、lence と and の連続した2個の弱音節が、弱音節1個分の時間で読まれ、slow という語が、強音節1個と弱音節1個分の時間をかけて、文字どおり「ゆっくりと」読まれることになります。言葉をかえて言えば、意味を考えながらこの行ができるだけ韻文的に読もうとする、行為で速度が落ち、その行末の語句の意味が一層強調される、ということになります。こうした強調の仕方は、韻律を持つている語文しかできません。このように、slow という語を slow に読み、quiet という語を quiet に発音するというのは、それぞれの単語が図像的に iconic に用いられているということになりますが、この "Ode on a Grecian Urn" という作品自体、語り手が想像上の瓶に語りかけることによって、瓶を実際の図像として言語的に作り上げるという作品だという点を考えますと、冒頭2行が韻律的に図像的機能を果たしているといふことは、作品のテーマとの関係からしても、非常に重要なことだと思います。

*

*

*

次は、Keats 以上によく知られている、Thomas Gray (1716-71) の *Elegy Written in a Country Churchyard* の冒頭部を見てみましょう。この作品は英米でも有名な詩で、OED の総引用数は全部で183例。作品の総行数が128行ですので、平均1行あたり1.4例以上が例文として収録されています。

The curfew tolls the knell of parting day,

The lowing herd wind slowly o'er the lea,

The plowman homeward plods his weary way,

And leaves the world to darkness and to me. (ll. 1-4)

どの注釈書にも必ず載っているのが、weary way における weary が転移修飾語句 (transferred epithet) だということです。つまり、元来 weary であるのは plowman もしくは、その動作であって、way ではないからで、

weary という修飾語句 (epithet) を本来修飾しない語句に転移して (transfer) 用いているからです。では、それによつてどういう効果が生じているのでしょうか。wind の語義は、OEDによると、

wind : 7. b. To move along in a sinuous course; to go or travel along, up, down, etc. a path or road which turns this way and that.

とあり、用例に Gray のこの詩行が引用されていますので、間違いありません。しかし、同じ wind の項の別項には次のようない例があります。(老婆心ながら一言ご注意申し上げますと)、目当ての用例が OED の例文のなかにあろうものなら、他の部分には目もくろねい人が皆さんの中にいらっしゃるどちら、それは良いことではありません。とりわけ、近年、OED が電子化され、Gray の Elegy のように有名な作品になればなるほど、作品名・行数から逆に語義を引くことが可能になつてきていますので、なおさらのことご注意下さい。OED を引く時には、寄り道をするのが順路だとお考え下さい。)

wind : v' 7. d. with advb. acc., or trans. with obj. (one's or its) way, etc.
1667 Milton P.L. iii. 563 He..windes..his oblique way Amongst
Innumerable Starts.

1794 Mrs. Radcliffe Myst. Udolpho i. A rivulet that..wound its silent way beneath the shades it reflected.

1823 Scott Quentin D. xxxii. The mole..winds not..his dark subterraneous path beneath our feet the less certainly.

1857 Livingstone Trav. V. 101 The slow pace at which we

wound our way through the colony.

1887 L. Oliphant Episodes 28I A funeral procession, winding its solemn way to the cemetery.

1922 A. E. Housman Last Poems xli, Content..to wind the measures [= dances].

これは、wind の副詞的対格 (adverbial accusative) の用法として、wayなどを目的語にとることがあるという説明ですが、不思議なことに用例中、純粹な one's way という形は、1例 (1857年)しかなく、全6例のうち way を副詞的対格にしている4例 (1667, 1794, 1857, 1887年) 中、3例 (1667, 1794, 1887年)までが特殊な形容詞 (oblique, silent, solemn) を冠しており、path を副詞的対格にする1例 (1823年)も、他の例に劣らず dark と subterraneous という特殊な形容詞を冠しています。つまり、OEDのこの項の説明と用例から読み取ることは、wind + one's + adj. + way という表現がかなり一般的だということがわかります。

さて、以上の点を踏まえて、Grayに戻って考えてみると、weary way は plowman を主語とする動詞 plod の副詞的対格であり、文法的には1行前の wind とは無関係ですが、表現上の慣用からは、wind の隠語とみなしてもよいことになります。つまり、wind の主語である the lowing herd 牛との関係が生じる可能性が多分にあるということが言えます。これがもし散文ならば、このように明白な文法的繋がり以外の関係を認めることは文法違反になるのですが、韻文の読み方はそうではありません。結論を急ぐ前に次の例をご覧下さい。

plod の語義です。これも OED に用例があります。

- plod : 1. b. trans. To trudge along, over, or through (a road, etc.); to make (one's way) by plodding.
- 1750 Gray Elegy 3 The plowman homeward plods his weary way.
- 1816 Byron Ch. Har. III. III. The journeying years. Plod the last sands of life.
- 1896 A. E. Housman Shropshire Lad xvi, Nor plod the winter land to look for willows in the icy brook.
- 1903 R. D. Shaw Pauline Epist. 176 In obedience to a dream.. Augustus plodded the streets of Rome and gathered coppers as a beggar.

ここで注意しておきたいのは、Gray の用例が初出などいふことです。初出だということにより、この1ー項にある他動詞としての用法は Gray の当

時としては新しい用法だったということが分かります。すなわち、動詞 plod と、この場合の目的語 weary wayとの繋がりは、当時としては、あまり強くなかったということです。

ここまでくれば勘のよい方はお分かりだと思いますが、問題のweary way を中心に考えてみると、本来の動詞 plod との結びつきが弱まつただけ wind との繋がりが一層強くなつたということです。plod との繋がりより wind との繋がりの方が強いといふのは、言いすぎとしても、それと同等くらいの結びつきを作者 Gray 自身は感じていたといえるでしょう。以上の語学的考察が意味のうえにどう反映するかといえば、疲れているのは、農夫だけではなく、牛もなのだ、ということになります。そこで、農夫も疲れ、牛も疲れ、あたり一面に疲れた雰囲気が漂つているとすれば、weary が修飾している道 way までもが疲れている、と表現／解釈しても、あなたがちゅきすぎた表現／解釈とはいえないかもしません。こう考えてくると、転移修飾語句の説明の時に本来 way は weary ではないとした前提そのものが散文的 prosaic に、つまり味気なく思えてきはしませんでしょうか。もし、皆さんのがいいらっしゃれば、そういう方は、十分に韻文を楽しむだけの素養と資格がおあります。

(後略)

(東京大学)